

スピリチュアル・ツーリズムと地域開発 イギリス、グラストンベリーの行政の対応の変化

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

要旨

本論では、スピリチュアリティという「宗教」の商品化に関し、観光の視点からみていく。イギリス南西部のグラストンベリーという町は、スピリチュアリティに関連する店が多く、サービスも盛んで、関心をもつ人々が訪れている。地元民を中心とする議会は、自分たちとは異なる志向をもつ、このような来訪者の受け入れに当初は消極的だった。しかし、スピリチュアリティに関心をもつ移住者が増え、その一部が町議員となったこと、地方自治体が独自の開発策を打ち出しやすくなったこと、町内のすべての銀行が撤退したことをうけて、2015年頃から観光に力を入れ始めた。それでも、スピリチュアリティは地域に根差した実践ではなく、個人主義的で、受け取り方も人さまざまであることから、スピリチュアリティを核にした観光の推進にまでは至っていない。このことは、スピリチュアリティは消費主義と結びつきやすいが、地域開発としての観光の核とはなりにくいことを物語っている。

キーワード

観光、消費主義、ニューエイジ、スピリチュアリティ

1 はじめに

本論では、スピリチュアリティ¹⁾という「宗教」の商品化について、観光の視点からみていく。とくにスピリチュアリティに関連する店やサービスが豊富なことで知られる、イギリスのグラストンベリーにやってくる人々が関わる観光を事例に、議会の対応の変化に注目しながら、スピリチュアリティと消費主義について考える。

初めに、本論ではどのような意味で「スピリチュアリティ」という言葉を用いているか説明する。スピリチュアリティが指す対象は、研究者によっても地域によっても異なるが、宗教学者の堀江宗正は英語圏の書籍や心理学の論文の調査から、「スピリチュアリティは諸宗教の核心部分なので、キリスト教もスピリチュアリティを含むが、個人的に教会の外

でも探求できると見なされている」と分析している〔堀江 2019: 9-11〕。私はかつてイギリスでのフィールドワークに基づき、「宗教や教義の違いにこだわらず、神のような存在と直接対峙しようとする能動的な試み」と定義したことがある〔河西 2015: 10〕。このような概念にはキリスト教の影響がみられ、日本語のスピリチュアリティとはややニュアンスが異なる。グラストンベリーは英語圏なので、本論では上記の意味合いをもつ、個人主義的で脱教团的な宗教のあり方を示す語として捉える。

宗教学者のアレックス・ノーマン (Alex Norman) によれば、スピリチュアル・ツーリズムとは「宗教的实践と一致する、スピリチュアルな利益の意図的な探索を特徴とするツーリズム」であり、瞑想、ヨガ、山頂での瞑想、聖なる場所の訪問、スウェット・ロッ

ジやウェルネス・リトリートや修道院での滞在などがあり、宗教的実践や哲学の形式が参照される一方で、伝統的宗教性 (religiosity) を欠くという特徴をもつ [Norman 2011: 1]。この定義を参考に、スピリチュアリティ関連の事柄が豊富なグラストンベリーのような場所を訪れる観光も、伝統的ではなくても宗教性を感じることを目的とする旅の1つの形式、スピリチュアル・ツーリズムとして捉えたい。

つぎに、観光とスピリチュアリティの関係を考えるにあたって、スピリチュアリティと消費主義の関係をみておきたい。スピリチュアリティやそれに類する新しい宗教のあり方と消費主義の結びつき方についての先行研究は、「新しい宗教性 (religiosity) /スピリチュアリティの特異な形式は、現代の消費社会において典型的に商品化された表現」 [Dawson 2011: 309] のように、多種多様な選択肢の中から自分の好みに合う宗教を消費者のように選択できる状況と、「商業的な取引が意味と価値を聖化する」 [Bowman 2013: 208] のように、消費という行動自体の宗教性を指摘したものがあると思う。

スピリチュアリティが消費主義と密接に結びつくようになった背景を、宗教学者の山中弘はマーケットという言葉で説明している。1990年代以降、新自由主義経済の進展によってグローバルなマーケットが拡大し、消費主義が社会の全面に登場するという状況を反映して、伝統宗教の教えに飽き足らない人々の宗教的需要を満たす宗教マーケットを席捲していったのがスピリチュアリティである [山中 2020: iii]。現在、スピリチュアルなマーケットを担っているのは、制度宗教ではなく、一般メディアや文化産業、自治体や国家であり、これらが宗教的領域に存在する禁欲、礼拝、神秘主義的雰囲気やイメージを、一般の人々の好みにあうように加工して、スピリチュアルな商品としてマーケットに供給しているのである [山中 2020: 16-17]。

従来とは異なる見解をもって訪れた観光客に対する住民の困惑と、メディアや地元行政と協働しながら地域の商店街などが地域活性化に結びつけるしたたかさは、日本のパワースポット研究やアニメの聖地巡礼の研究で示されてきたし [cf. 岡本 2015; 山村 2011]、域外からの訪問者、管理者、地元民の関係性については、イギリスや沖縄の遺跡や聖地を巡る研究において取り扱われてきた [Blain and Wallis 2007; 門田 2020]。門田 岳久 [2020] が扱う久高島の事例は、行政の対応が分析されていて、本論の視座と重なるところがあるため、詳しくみておきたい。琉球王国時代から聖地とみなされてきた沖縄の久高島は、過疎化が進み、祭祀組織の存続も危ぶまれている。その一方で、「神の島」というイメージが本土にまで広がったことで、現在では久高島の宗教伝統とは異なる、独自の視点で島を特別視し、島内でスピリチュアルな活動を行う人も出てきている [門田 2020: 241]。久高島が属する南城市は、地元民の宗教観を尊重し、政教分離の観点から市が「宗教」を推しているを受け止められないように配慮しつつ、宗教的イメージを活用した地域開発を進めていきたいと考えている [門田 2020: 243]。

グラストンベリーの場合、スピリチュアルな活動が、地域の伝統的な宗教より目立った形で展開されている。これまでのグラストンベリーの観光と地元民をめぐる研究の中で私は、町の行政がスピリチュアル・ツーリズムを積極的には支援しない理由として、町の主だった対抗文化運動の価値観を引き継ぎ、観光客は政府などの組織を嫌うため、行政は観光推進の表舞台に出ることを差し控えているのではないかと述べた [河西 2013: 11-12]。またグラストンベリーという町の特異性は、神話や景観といった場所の固有性というより、モノを媒介とする対面コミュニケーションや店が創り出す町の雰囲気にあるのではないかと分析した [河西 2020: 326]。本論では、

町の観光をめぐる行政の対応の変化をみていくことで、スピリチュアリティと消費主義を考えていきたい。

私は2005年からグラストンベリーで調査を続けているが、本論で扱うデータはおもに2017年5～6月、2018年8月、2019年8月、2020年2～3月に、参与観察の他、観光業従事者や地元出身者へのインタビューと文献調査を行い収集した。文中で示す年齢はインタビュー当時のものである。なお、2020年3月後半から、新型コロナウイルスの影響により、町の観光業は打撃を受けたが、この点については改めて論じることとし、本論はそれ以前の状況を取り扱うこととする。

2 風変わりな訪問者の歴史と提供される商品

イギリス南西部のサマーセット州に位置するグラストンベリーは、人口8932人、そのうち約95パーセントをヨーロッパ系白人が占める、典型的なイギリスの田舎町である〔Somerset Intelligence 2013〕。その一方で、この規模にしては多様な宗教活動がみられる〔河西 2015: 69-78〕。キリスト教として英国国教会、メソジスト、合同改革教会、カトリック、兄弟団、福音派、エホバの証人がある。他に女神運動²⁾の活動が盛んで、ドルイドや魔女などのペイガニズム、魔術、スーフィズムの実践者もいる。仏教やインド由来の教え、瞑想のグループも、小規模ながら、それぞれ複数活動している。いずれも活動の中心はアジアからの移民ではなく、西洋人である。

数世代前から農場を経営する一家の出身で、長年、町議員を務めている男性（60代）は、町にあふれる多様な信仰について、次のように話した。

ああいうのはくだらないと思う。でも、修道院が焼けた後に修道僧がやったことに少し似ている。突然、修道僧がアーサー

王を掘り当てた。それで、巡礼者が町にやってくるようになったから、火事の後、修道院を再建できたんだ。同じようなものだよ。【2019年9月26日】

彼は「偽」物語で町が潤うことを肯定的に捉えているのだが、町に数世代暮らす人々は自営業であったり不動産を貸し出せたりするため、観光客を歓迎する傾向にある〔河西 2013〕。また真偽はともかく、グラストンベリーにまつわる特異な歴史を否定する人はいない。以下では、外部からの訪問者に注目して、町の歴史を辿ってみる。

7世紀末にローマからカトリックが伝来したときには、ケルト系の人々によって、アイルランドやウェールズからケルト化されたキリスト教が伝わっていて、その後も当地はケルト文化とカトリックの交流地点であり続けたらしい〔青山 1992: 218〕。後に建設されたカトリックの修道院の一画から、1190年（もしくは1191年）、アーサー王とグニヴィア妃のものとされる遺骨が発掘され、王が死後に運ばれた神秘の島アヴァロンはグラストンベリーだとみなされるようになる。さらに13世紀半ばまでには、キリストが最後の晩餐で用いた聖杯を大おじのアリマタヤのヨセフがグラストンベリーに運び、イングランドで最初の教会を建てたという説が定着する。これらの伝説は、1184年の大火事の後には財政が苦しくなった修道院が捏造したのだが、おかげで修道院の権威と尊厳は高まり、町は巡礼地として栄えることになり、グラストンベリー修道院も当時、最上位のウェストミンスター修道院に匹敵するか、それに次ぐほどの豊かさを誇った〔青山 1992: 99-100, 139〕。先の男性は、この捏造に伴う巡礼者の激増を、現在の状況になぞらえたのである。

その後、イングランドにおける宗教改革に伴い、修道院が閉鎖されると、町は衰退していった。しかし19世紀末、産業革命の反動から自然への賛美とケルト文化への関心が高

まったことを受け、初期キリスト教やケルト文化と結びついたグラストンベリーは、ロマン主義者や神秘主義思想家をひきつける。20世紀初頭には、鉄道網の発達と英国国教会が後援するトラストが廃墟となった修道院の敷地を購入し整備したことで、英国国教会の巡礼団が訪れるようになり、観光客が増加していく [Bowman 2013: 212]。

キリスト教の聖地として知られる一方で、農業と羊皮加工業を主な産業とする田舎町だったグラストンベリーが様変わりするのは対抗文化運動が活発化した1970年頃である。1970年と1971年に近郊の村で開かれた、野外ロック・フェスティバルも影響し、初期キリスト教やケルト文化とのつながりに関心をもったヒッピーたちが押し寄せたのである。

突然の闖入者たちを町の人々はどのように見ていたのだろうか。子供の頃からずっとグラストンベリーの英国国教会に通っている教師の女性（60代）はヒッピーが来る以前の状況を次のように話した。

〔そういう人も〕いましたよ、少しは。グラストンベリーはレイライン³⁾とかで神秘的〔な場所〕として有名だったから、こういうのに魅かれて、そういう人はいつもいました。でも、沢山ではありませんでした。静かな市場町でしたね。【2010年7月24日】

サマーセット田園生活博物館には、1990年代に地域の人々に行ったインタビュー記録が保管されているのだが、ヒッピー以前から風変わりな放浪者がいたことを多くが証言している。また、私自身が高齢の住民から耳にした話と合わせて、当時の若者の一部は、退屈な田舎と思っていた町にやってきた風変わりな人々との交流を楽しんでいたこと、その一方で、多くの大人たちは奇妙な考え方自体はそれほど気にしなかったが、住宅街での無

許可の野宿や騒音を迷惑に思い、LSDや麻薬の使用を危惧していたことがわかった。

ヒッピーは1970年代後半には去ったが、1980年頃、バスなどで生活する非定住者トラベラーが町のある農場に続々と滞在するようになり、住民との間に大きな衝突が起こる。トラベラーとヒッピーは、身なりの汚れ具合や非定住性から同一視されることも多い。トラベラーの多くは、マーガレット・サッチャーの経済改革のあおりを受け、不景気のため就職できなかつたり、家賃の急激な高騰により家を失ったりした若者だったといわれる。彼らが暮らした農場は、ある裕福な女性が農作業に従事しながら無料で滞在できるコミュニケーションのような場を目指して、地元の農場主から買い取った場所だったが、資金や衛生の面で運営は行き詰まる。農場と滞在者の不衛生さと騒々しさに住民は怒り、呆れ、困り果て、最後には郡が法的手段を用いて農場を閉鎖した。

1980年代以降、現在オルタナティヴと呼ばれる、中流階級出身で学歴も高い人々の移住も目立ち始めていた (Bowman [2013: 213] が指摘するように、人だけでなくビジネスやイベントも、グラストンベリーではオルタナティヴと呼ばれる)。彼らはヒッピーのようにグラストンベリーを特別視し、この土地には古代から特別なエネルギーが流れているなどと信じて、町をスピリチュアルな場所だとみなし、物質的な豊かさより精神的な充足を求めて、都会や故郷を離れてやってきた。この時期の町は主要産業の羊皮加工業の衰退が止まらず、経済が悪化していた。失業者が増え、職を求める若者は流出し、中心部には空き店舗が目立ち始めていた。移住者はそんな空き店舗にスピリチュアリティ関連の商品や書籍を扱う店を開き、セラピーセンターや宿泊施設、イベントの企画を始めた。するとスピリチュアリティに関心のある人々が町を訪れるようになる。図1⁴⁾からは、1980年代後半から店舗数が急増し、それ以

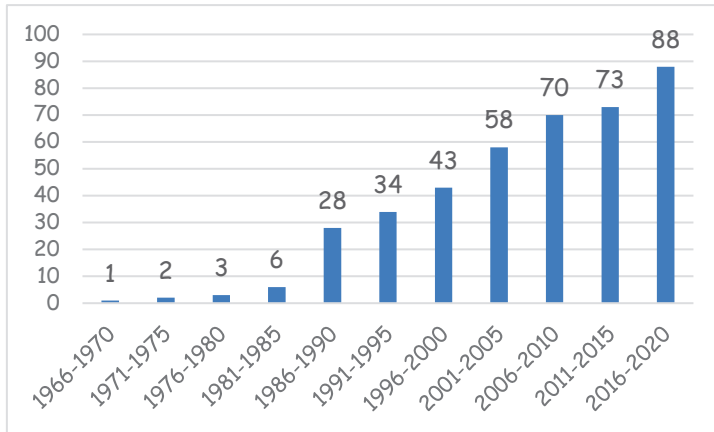


図1 オルタナティブ関係の店舗数の変遷

来一貫して増加を続けていることがわかる。

詳細は拙論〔河西 2020〕を参照してほしいが、信仰と関連する店としては、英国国教会とローマ・カトリック教会が、教会内でポストカードや冊子など、教会に関係するものを販売している。近隣市の正教会に通うイギリス人のキリスト教関連の書店もある。また、スーフイズムのある教団の信者がランプとハーブの店を、マイトレヤ・モナステリーという仏教系のグループがヒーリング・グッズの販売もするセラピーセンターを経営している。女神運動も女神神殿内に小さな物販コーナーをもち、向かいのギフトショップで雑貨や書籍を販売している。その他、天使やマリアのグッズ、ペイガン・グッズ⁵⁾、妖精や竜のグッズ、アジアやアフリカ、ネイティブ・アメリカンの雑貨や衣料品、パワーストーン、ハーブやエッセンシャルオイル、チャクラ関連商品、大麻関係（麻製品、吸引器、カンナビジオール製品）、タロットカード、有機食品、こういった事柄に関する書籍などがよく販売されている。瞑想や占い、セラピーや代替療法、ヨガや太極拳、自己成長関連の講座は、個人や団体が毎日のように開催している。宿泊施設の担い手もオルタナティブであることが多い。

このうち、グラストンベリーとの学術的な裏付けがあるのは、中世のカトリックの修道

院ぐらいで、あとは無関係、もしくは伝説か創作にもとづいて関係が示唆されたものである。そのような例としては、たとえば女神運動の人々は、伝説や他国の文化を引き合いに出して、かつてここには女神信仰があり、この町の地形は女神の形をしていると主張している。またオルタナティブの多くは、この土地のエネルギーが高いため、スピリチュ

アルな事柄が行われることは必然と考えている。

店の選定権は建物の所有者にあり、昔ながらの商売の店が閉まるとオルタナティブの店が入ることが多い。なお、普通の品を扱う店が少ないことに不満を漏らす人はいるが、後述するように隣村にあるアウトレットのため、そういった店が経営を成り立たせることは難しいことも理解している人が今では大半である。

まとめると、キリスト教の巡礼地として知られたグラストンベリーには、1970年頃から主流社会とは異なる価値観やライフスタイルをもつ人々が訪れ、移住する者も出てきた。彼らはスピリチュアリティを扱う観光業の担い手として、経済の活性化に貢献していく。

3 現在、町を訪れる人々

私が初めて町を訪れた2005年11月は、観光の閑散期に当たり、通日も店も人気はまばらだった。しかし今では1年中それなりの数を見かける。観光業従事者も当時と比べて確実に観光客は増えていると語る。その背景には2008年からの金融危機後の不景気やEU離脱の影響で進むポンド安のため、海外より国内を訪れるイギリス人の増加と、外国人、とくにEU各国からの観光客の増加があ

るようだ。グラストンベリー単独ではないが、町が属するメンディップ郡⁶⁾の場合、2013年の年間観光客数は日帰り客と宿泊客を合わせて、約490万人 [Visit Somerset 2019: 4] であり、2001年の約230万人 [Somerset Strategic Partnership 2003: 84] のおよそ2倍である。グラストンベリーの観光施設の入場者数や宿泊施設の滞在者数から算出した町独自の試算によると、2016年頃の時点で年間約75万人が訪れている [Glastonbury Chamber of Commerce & Tourism n.d.]。

ただし、町を訪れる人のすべてがオルタナティブではない。2017年6月1日、町のもっとも中心部の駐車場に駐車する人に対し、グラストンベリーで何をするのか、日帰りか宿泊を伴う旅行か尋ねてみた（宿泊先はグラストンベリーに限らない）。なお1966年に旅客用の列車が廃止されてからは、町を通る公共交通機関はバスに限られており、自家用車でやってくる人はかなり多いと思われる。

この調査によると、午前9時から午後5時半の間、ツアーの長距離バス5台と、用事のために駐車した地元民8組（11人）を除くと、85組（208人）が駐車した。そのうち、日帰り客は35組（96人）で近隣在住者が多く、宿泊客は48組（112人）で海外も含めた遠方からの人が多かった（学校が休暇の時期だったため、普段より訪問者は多かった）。交わした会話からグラストンベリーを特別視している、女神神殿やパワーストーンの店を訪れるなど、オルタナティブである可能性をもつと判断できたのは15人だった。町外れの丘トールと修道院が人気の目的地だったが、日帰り客はトール、宿泊客は修道院と答える人が、それぞれやや多かった。ただしこの駐車場は修道院の裏にあり、修道院を訪れる予定の人がより多く駐車していたとも考えられる。日帰り客には買い物や食事が目的の人、宿泊客はチェダーやウェルズなど近隣の観光地も訪れる計画の人も多かった。両者とも隣村ストリートにあるアウトレット

での買い物を予定していたり、友人に会いに来たりした人も少なくなかった。目的地の通過点として立ち寄った人、別の町の催し物を見に行くため宿泊だけする人もいた。

「店に行く」と答えた人の中には、好奇心からといった表情や話しぶりの人も少なくなく、風変わりな店を訪れたいと考えるのは、オルタナティブだけではない様子が窺えた。なお、オルタナティブは、ハーブなど普段に使用するスピリチュアリティ関連雑貨を購入することが多く、スピリチュアリティ関係の講座の受講など、数日間町に宿泊する人も少なくない。そのため、調査をした修道院近くの有料の駐車場ではなく、宿泊先近くの路上に無料で駐車する人が多いことも考えられる。

長距離バスでやってくる観光客だが、そのほとんどはイギリスを巡るツアーの一環で訪れる外国人⁷⁾で、グラストンベリーでは修道院を1～2時間見学して、また別の町に行ってしまう。また、毎年夏にイギリス各地からそれぞれ組織されるイギリス国教会とカトリックの巡礼の日、毎年秋に開催されるカーニバルの日にも、長距離バスで多くの人々が訪れるが、オルタナティブの店で買い物をする人は少なく、日帰り客も多い。そのため、長距離バスでやってくる観光客が理想的な観光客だと認識されている様子はない。

なお、ケルト暦の8つの季節の祝祭の頃には、儀式やイベントが開かれるため、オルタナティブの観光客が増加する。また女神運動、巨石建造物、ミステリー・サークル⁸⁾など、数日間にわたって開かれる大規模なオルタナティブのイベントの時期、参加者は町内に宿泊し、買い物も沢山するし、カフェやレストランで外食をしている。

4 町議会の対応の変化

2017年11月、先述の駐車場内に立つ建物が、観光案内と行政サービスを兼ねた「グ

ラストンベリー情報センター」としてオープンする（写真1）。その前年に議会が購入し、整備を進めていたのだが、町として観光を積極的に推進する様子がほぼみられなかったこれまでの状況を考えると、大きな変化のように思えた。なぜ町は観光を推進するようになったのだろうか。町として、何を観光名所として提示しているのだろうか。このような疑問をもったとき、普通は観光課や観光案内所を訪れる。しかし2017年5月に観光に関する調査を始めたとき、私は誰に訊けばよいのかわからなかった（後になって、町の観光を代表するスポークスマンの不在を、一部の関係者が問題視していたことを知る）。町に観光課はないし、2つある観光案内所は十分に機能していなかった。そんなときある友人から最近復活した商工会議所の代表を訪ねることを勧められ、この方から観光推進に携わる町長や職員、商工会議所のメンバーを紹介された。また別の友人から紹介された観光推進に携わっていた元議員（インタビュー当時）にも話を伺った。

彼らの話や開発に関する複数の調査報告書を総合して考えると、観光推進に舵を切った要因は3つある。1つ目は2015年、町内の3つの銀行すべてによる店舗閉鎖の通知である（その前年、すでに1行が閉鎖されていた）⁹⁾。オンラインの発達により来店者が減った店舗の閉鎖はグラストンベリーに限らないし、この規模の町に4つも銀行の店舗があったことの方が驚きなのだが、住民のショック

は大きかった。当たり前のようであった銀行の一斉撤退は町のビジネスの衰退に結びつく気がしたらしく、有志による反対運動が繰り広げられた。この動きの中から2016年、商工会議所が復活する[Glastonbury Chamber of Commerce & Tourism n.d.]。商工会議所は以前もあったが、資金不足から数年間活動していなかった。商工会議所が機能していれば銀行閉鎖という事態にももう少し有効な手を打てたと考える、移住者を中心とするビジネス関係者が、資金援助はほとんどない中、再結成したのだ。メンバーはグラストンベリーの将来には観光の推進が不可欠と考え、2015年に「グラストンベリー活性化(Promoting Glastonbury)」と称する計画を策定し始めた。

2つ目は2012年、市町村レベルでの「近隣開発計画(Neighbourhood Development Plan)」策定を可能とする国の地方政策の変化で、グラストンベリーは2016年に計画書を郡議会に提出した[Glastonbury Neighbourhood Plan Steering Group 2016]。これは、商工会議所の動きとも重なり、「グラストンベリー活性化」も町議会との共同で進められている。なおイギリスの場合、町の議会の権限は道路や公共施設の管理と美化など、かなり限られているし、町長も町議員職も報酬はない。

町として観光を進めるべきという声は、2000年代前半にもあった。有志が基金を得て、住民の4分の1に聞き取りを行うなど



写真1 グラストンベリー情報センター 左：外観、中・右：室内
（左・中：2018年8月5日、右：2018年8月4日 筆者撮影）

した調査の報告書には、町の抱える問題点として失業率の高さと賃金の低さが挙げられ、観光は町の重要な産業だと認識されているが、観光関連の収入があると答えた住民は20パーセント以下にすぎないこと [GCDT 2005]、観光客がもたらす現金による町の繁栄が不可欠であり、観光関連の職業訓練と雇用機会の増大の必要性が指摘されている [GCDT 2004: 28]。この調査結果と世論調査を利用し、別の基金を得て策定された提案書「グラストンベリー町計画 (Glastonbury Town Plan)」においても、町として進めるべき7つの事柄の2つ目として、「観光と(特徴的な自然景観の)保全」が挙げられている [EDAW 2006: 1]。

しかし、当時これらの調査に携わっていた男性(50代)によると、この提案書は議会を通らなかった。議会が管理する町の会館ではスピリチュアリティ関係の催し物が開催されていたので、そういった事柄が忌避されていたわけではないだろう。また2001年8月30日の週刊地方紙「セントラル・サマーセット・ガゼット」の1面¹⁰⁾には、日中の屋外で堂々と麻薬を吸う人への住民の怒りに対して、町長が「こういうことはグラストンベリーで見たくない、観光の町なので」と答えており、観光の重要性は理解されていたようだ。先の男性によれば、提案が拒否された1つの理由は、当時の議員が町の発展は廃業した羊皮の染色工場跡地の開発にあると考えていたためである。町外れのこの場所は工場が1982年に閉鎖されてから放置され、先述したトラベラーのたまり場になっていた。2001年に地域開発庁が住宅開発の目的で購入したが、染色による土壌汚染と近くの下水処理施設の悪臭のため断念せざるを得なかった。もう1つの理由は観光施設の非協力的な姿勢である。この頃、地域計画は郡が主導していたのが、施設の管理のあり方を郡に管理されたくないと思われたそう。その後、2008年に始まった金融危機の余波でイギリ

ス全体が深刻な不景気に陥ると、国も郡も予算不足となり、グラストンベリーの観光推進計画は立ち消えとなった¹¹⁾。

2006年には消極的であった議会が現在協力している背景にはオルタナティブに支持者の多い緑の党の躍進があり、これが観光推進に転じた要因の3つ目である。グラストンベリー帯は保守党が優勢な地域だが、2007年に無所属の候補者としてではあったが、緑の党員が2人当選した。16人の町議員の選挙は4年ごとに実施されるのだが、2011年には4人、2015年には7人、2019年には9人が緑の党の候補者として当選し、2015～2017年、2019年の町長は同党の議員が務めている(町長は議員から選出される)。議員になった党員には2000年代の調査に携わっていた者もいるし、元々オルタナティブな視点からの町の特別性に魅かれて移住した人々もいて、観光を進める流れが生じたのは必然だったといえる。

議会が冒頭で述べた建物を購入したのは、実は観光とは関係がない。長年使われていなかったこの建物が売りに出されたとき、大型チェーンのバブによる購入計画があった。しかしチェーン店の進出を嫌う議会が2016年に購入を決め、観光を促進する流れと呼応し、翌年、観光客情報センターと巡礼者受付センター¹²⁾、行政サービスの受付が設置された施設としてオープンさせた。ただし、私がセンター内で観察した限り、受付を共有する3組織が協働する様子はみられず、スタッフが不在の際に業務を補完しあうぐらいだった。同じ時期、有料の州の観光ホームページへの掲載を決め、町の主要観光名所として6つ(町外れの丘トール、ユニークな店、修道院、サマーセット田園生活博物館、チャリス・ウェル庭園、近隣の野生生物保護と先史時代の遺跡で知られるアヴァロン沼地)を挙げたチラシ(写真2)を近隣市町村に配布した。

議会が観光を促進するようになったのは、グラストンベリーをスピリチュアルな視点か



写真2 町の観光パンフレット（2020年1月4日筆者撮影）



ら特別視したり、観光業に携わったりしている移住者が、町の中で政治的な力をもち始めたからだといえる。

その一方で、スピリチュアリティを観光推進の核にしようとする姿勢も窺える。毎年11月末には「霜のフェア (Frost Fair)」という、いわゆるクリスマス・マーケットが町の主催で開かれているが、毎月開催されている霊媒や占い師、ヒーラーが集う「精神・身体・霊のフェア (Mind Body Spirit Fair)」のようなイベントに対し、町が管理する会館は貸しても、町が主催するようなことはない。

2016年に町役場の書記に採用され、地域経済活性化の1つとして観光の推進に積極的に取り組んでいる男性(50代)は、隣村のアウトレットはイギリス最大規模であるため、グラストンベリーでは普通の店の経営は成り立たないと話したうえで、つぎのように語った。

町の店はユニークだ、〔ドラッグストアの〕ブーツ以外、ブランドがなく、個人営業だから。これが観光客を惹きつける。(中略) グラストンベリーはロンドンと〔イギリス南西端の〕コーンウォールの中に位置するので、コーンウォールに行く人にもっと訪れてほしい。【2017年5月31日】

書記は町の店が独特である理由をスピリチュアリティというより、個人経営である点だとし、スピリチュアリティの講座やイベントに来る人よりも、コーンウォール地方というイギリス有数の保養地に出かける人たちに立ち寄ってもらうことを目指している。

町が配布した先述のチラシの作成にはこの書記も携わっていたのだが、スピリチュアリティを重視しない様子がみてとれる。ツール、チャリス・ウェル、修道院は、第3章で述べた、アリマタヤのヨセフやアーサー王などの歴史や伝説と絡めて語られるだけでなく、レイラインや地球のエネギーなどのオルタナティブな言説も豊富で、オルタナティブが執筆した書籍でしばしば取りあげられている。一方、サマーセット田園生活博物館と町から約8キロメートル離れたアヴァロン沼地がスピリチュアルな文脈で語られることはほとんどない。また、ユニークな店の1例として写真が掲載されている8店はいずれも個人経営だが、スピリチュアリティとは関係がないパン屋と花屋が含まれているうえ、近隣市町村でも開かれる定期市にも触れている。

町は地域開発の一環として、観光を進めようとしているのだが、スピリチュアリティに関心がある人々に焦点を絞ろうとはしていないのである。

5 観光事業者の反応

2017年の夏、グラストンベリーに滞在していた私は、町の観光を推進しようとする住民が熱く語る夢に耳を傾けていたのだが、一方でオルタナティブとして観光業に携わる長年の友人と雑談をしていると、冷めた反応が返ってくる事が多く、そのギャップに戸惑っていた。そのような店の1つである、魔女雑貨店に勤務する友人と店で立ち話をしていた際、商工会議所のことに触れると、「それ、今問題になっている人たちだよ」と言われた【2017年6月9日】。前年のあるイベントの際、中心部の歩道に並んだ屋台が入り口を塞ぎ、営業を妨害されたという店舗からの苦情を受け、この年のそのイベントは中止が決まったのだが、商工会議所は住民から広く意見を聞かず独断的だとして、中止に反対する署名運動が起こっているのだという。「すごく楽しかったし、その日、うちの店は儲かったよ」と語る彼女は商工会議所へのいら立ちを隠さなかった。

以前の私の下宿先の隣人で、町でも有名な宿泊施設を営むオルタナティブの夫婦に、「町の全宿泊施設の空き状況がわかるシステムをつくる計画があるらしいね」と話を振ったところ、夫は「聞いたことないね。空き状況は知らせたくない。土曜のみ1泊でなく、金土と泊まる客に来てほしいんだ」と答え、妻も「そういうシステムには登録したくない。自分たちで管理できなくなる」と拒否反応を示し、夫が「それは成功しないと思うな」と続けた【2017年8月4日】。このシステムは、町外れで大規模な宿泊施設を経営している商工会議所のメンバーが提案していた。彼女は、商工会議所のメンバーには宿泊施設の経営者は2人しかいないし、観光推進を話し合う場を設けても忙しいのか誰も来ないと嘆いていたのだが、この夫婦の語りからは忙しいどころか関わりたくない様子が窺える。

トールや修道院などの主要観光施設の協働も以前からほぼみられない。各施設の代表が会合をしても、トラスト制度をとる施設が少なくなく、このような施設の場合、会合への出席者に権限がなく、理事に判断を仰ぐ必要があるため、会合の場での意思決定が困難なのだと関係者から説明されたことがある。しかし、こういった非協力的な反応からは、店舗や宿泊施設の反応と同様、他者にイニシアティブを取られたくないという思いも伝わってくる。

6 おわりに

1970年代以降、グラストンベリーは外からやってくる伝統的な価値観やライフスタイルを共有しない人を町として受け入れるべきか、逡巡してきた。お金を落とす一般の人々とオルタナティブには来てほしいが、人騒がせなヒッピーとトラベラーは追い出したい。しかし、オルタナティブの一部とヒッピーやトラベラーの一部は、組織を嫌い自立を好むなどの気質が似ていて、動物愛護や自然保護など思想の面で区別しにくい。

観光業従事者による積極的な協力はみられないが、近年、国の地方政策の変化とオルタナティブの議員が増えたことで、町として観光を推進する方向に動き出しはしている。しかし、町にあふれるスピリチュアリティに関連する店やセンター、講座やワークショップを積極的に利用した観光を進める様子はみられない。スピリチュアリティを前面に出さない背景には、まず拙論[河西2013]で述べたように、スピリチュアリティに携わる人々が、信仰に対して個人主義志向であることが考えられる。宿泊施設や店を運営する人の大半もオルタナティブなのだが、彼らが協力で消極的な理由もここにあると思われる。続いて、第4章で記したようなスピリチュアリティに熱心なわけではなく、好奇心から訪れる人が少なからずいることも関係しているだ

ろう。スピリチュアリティを強調しすぎず、他の事象も織り交ぜて提示することで、彼らの訪問を期待していると考えられる。

さらに、スピリチュアリティは消費主義との密接な結びつきが指摘されてきたが、その言説は地域に根差していないうえ、学術的な証明を欠くものが多く、町を挙げてのスピリチュアル・ツーリズムの推進はやりにくいと思われる。このことは、既存の宗教の形式とは異なる形で展開されているスピリチュアリティが、特定の地域の伝統から離れた形で展開していることを改めて示唆しているといえる。

行政があえて何かを仕掛けなくても、住民は自由にビジネスをしているし、観光客はやってくる。スピリチュアリティを否定するわけでもなく、地域開発としての観光の核にするわけでもない。こんな風に町を全国的に有名にしているスピリチュアリティに対して曖昧な姿勢をとりながら、観光を進めようとする行政の取り組みは、今のところうまくいっているようにみえる。今後も調査を継続し、展開をみていきたい。

謝辞

本論の資料の一部は拙著〔河西 2013, 2015, 2020〕と重複していますが、着想は「拡張現実研究会／ダークツーリズム研究会共催シンポジウム 観光研究のフロンティア」（2017年2月10日、北海道大学）での発表の際、参加者からいただいたコメントから得ました。調査にご協力いただいた方々と合わせて、お礼申し上げます。

<注>

- 1) 「ニューエイジ」や「スピリチュアリティ」は厳密には同じではないが、一般の使用においては類似した事柄を指すことが多い。本論では、基本的には現地調査においてより好まれていた後者を用いる。
- 2) 女性形の神 Goddess を崇める女神運動

とは、男性形の神 God を崇拝するユダヤ教やキリスト教に代わる女性のための信仰として1970年代に創られた信仰の総称。詳しくは拙著〔河西 2015〕参照。

3) 古代の遺跡、中世の教会、古代の墓地の中には、目に見えないエネルギーの上を直線に並ぶよう造られたものがあるという説を、1921年にイギリスのアルフレッド・ワトキンス (Alfred Watkins) が提唱した。この直線がレイ、通称レイラインである。

4) 1960年代から2019年まで町の中心部の店舗を占めていた店の職種を調べ、5年ごとにその店舗を占めている期間がもっとも長い店をその期間の代表的な店とし、オルタナティブ関係の店舗数を数えて図にした。

5) ペイガン・グッズとは、キリスト教到来以前のヨーロッパにあったとされる信仰をもとに創りだされたペイガニズムの儀式や祭壇で使用する物。神々の像、五芒星などのシンボルが付いた金属製容器や儀式用ナイフなどがある。

6) メンディップ郡の主要な町は、グラストンベリーの他、大聖堂で知られるウェルズ、野外催事場を有するシェプトン・マレット、靴のクラークスの本社とアウトレットのあるストリート、アートで有名なフロムである。

7) 私が調査をした日は、北ウェールズからの1台の他は、ドイツから3台、ベルギーから1台といずれも外国からのツアーだった。2017年5月30日にはアメリカ、カナダ、オーストラリアからの客を乗せたイギリスを周遊するツアーのバスが、2017年5月31日には、スロバキアとチェコから、それぞれ14～15歳、16～17歳の学生を乗せた、イギリス周遊のバスが停まっていた。

8) ミステリー・サークルとは、小麦や大麦、トウモロコシなどの穀物が円状に倒されてできた模様のことだが、円を複数組み合わせた模様や、円以外の複雑な模様もある。

9) ナショナル・ウェストミンスター銀行 (1812年～2014年11月)、HSBC (1970

年頃～2015年11月)、パークレイ銀行(1962年～2016年3月)、ロイズ銀行(1885年～2016年4月)。なお2016年11月、銀行業務も行う住宅金融組合ネーションワイドがロイズ銀行の後に入った。

10) *Central Somerset Gazette* “Mother Horrified at Public Drug Taking” by Emma Frampton (2001年8月30日1面)。

11) 2012年のロンドン・オリンピック関連プロジェクトに公募基金が優先的にまわされた結果、多くの小規模な団体が活動休止を余儀なくされたという嘆きを2009年から2010年にかけて何度か耳にした。

12) 観光客情報センターは、自治体から資金援助されている場合もあるが公営ではない。主な収入源は物品販売と宿泊施設の予約手数料だが、ネット予約が進んだ現在、後者の収入は激減している。巡礼者受付センターはグラストンベリーを聖地とみなしてやってくる「巡礼者」を対象として、2007年に有志が設立したが、資金源に乏しい。両者ともスタッフの多くがボランティアであるなど、経済的に困難な状況にあり、家賃の心配がいらないこの施設への入居は、結果としてその存続につながった。

<参考文献>

- 青山吉信 1992『グラストンベリ修道院——歴史と伝説』山川出版社。
- 岡本亮輔 2015『聖地巡礼——世界遺産からアニメの舞台まで』中央公論新社。
- 門田岳久 2020「神々の過疎化——地域開発のなかの聖地と政教分離」山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、pp. 229-248。
- 河西瑛里子 2013「オルタナティヴと対峙する地元民——イギリスのグラストンベリーにおけるニューエイジ産業をめぐる」『宗教と社会』19: 1-15。
- 河西瑛里子 2015『グラストンベリーの女神たち——イギリスのオルタナティヴ・スピリチュアルの民族誌』法蔵館。
- 河西瑛里子 2020「ノスタルジック・ニューエイジ——スピリチュアリティの「聖地」グラストンベリー」山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マー

ケット』弘文堂、pp. 309-328。

- 堀江宗正 2019『ポップ・スピリチュアリティ——メディア化された宗教性』岩波書店。
- 山中弘 2020「はじめに」山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、pp. i-xii。
- 山中弘 2020「現代宗教とスピリチュアル・マーケット」山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、pp. 1-23。
- 山村高淑 2011『アニメ・マンガで地域振興——まちなちのファンを生むコンテンツツーリズム開発法』東京法令出版。

Blain, Jenny and Robert Wallis 2007 *Sacred Sites, Contested Rites / Rights: Pagan Engagements with Archaeological Monuments*. Brighton and Portland: Sussex Academic Press.

Bowman, Marion 2013 *Valuing Spirituality: Commodification, Consumption and Community in Glastonbury*. In François Gauthier and Tuomas Martikainen (eds), *Religion in Consumer Society: Brands, Consumers and Markets*. Abington and New York: Routledge, pp. 207-224.

Dawson, Andrew 2011 *Consuming the Self: New Spirituality as “Mystified Consumption.”* *Social Compass* 58(3): 309-315.

EDAW 2006 *Glastonbury Town Plan, Evidence 2006, Overview*. (unpublished)

Glastonbury Community Development Trust (GCDT) 2004 *Survey of Glastonbury Employers Final Report*. (unpublished)

Glastonbury Community Development Trust (GCDT) 2005 *Community Survey 2003/04 Summary Report*. (unpublished)

Norman, Alex 2011 *Spiritual Tourism: Travel and Religious Practice in Western Society*. London, New Delhi, New York and Sydney: Bloomsbury.

インターネット資料

- Glastonbury Chamber of Commerce & Tourism n.d. About Glastonbury Chamber of Commerce. <http://glastonburychamber.co.uk/history/> 2020年1月2日閲覧。
- Glastonbury Neighbourhood Plan Steering Group 2016 Steering Group Terms of Reference. <https://glastonbury-community.org.uk/steering-group-terms-of-reference/> 2020年1月3日閲覧。
- Somerset Intelligence 2013 Census 2011 Briefing Note: Ethnicity, National Identity and Country of Birth of Somerset residents. <http://www.somersetintelligence.org.uk/ethnicity-in-somerset-briefing-note.pdf> 2020年1月1日

閲覧。
Somerset Strategic Partnership 2003 Somerset
Community Profile.
www.somerset.gov/media/5C1E5/scp2003.pdf
2006年1月27日閲覧。

Visit Somerset 2019 Tourism in Somerset A
Destination Management Plan 2015 – 2020.
[https://wwwmedia.somerset.gov.uk/wp-content/
uploads/2019/07/DMP-Visit-Somerset-5-Year-
Delivery-Plan.pdf](https://wwwmedia.somerset.gov.uk/wp-content/uploads/2019/07/DMP-Visit-Somerset-5-Year-Delivery-Plan.pdf) 2020年1月1日閲覧。
(2020年10月26日受理)

Spiritual Tourism and Regional Development: How the Local Council in Glastonbury Has Changed

Eriko Kawanishi

Keywords

Tourism, Consumerism, New Age, Spirituality

I would like to investigate the commodification of spirituality from the viewpoint of tourism. Glastonbury is known as a spiritual centre in England, and many New Age shops and workshops attract people who are interested in New Age or alternative spirituality. Town councillors used to be reluctant to accept these “New Agers,” as they were different from local people, but more and more “New Agers” moved to Glastonbury and started businesses. The town council promoted tourism at least once in the early 2000s, and they have promoted it again more eagerly from around 2015. There were three reasons. Firstly, because more “New Agers,” who tended to be favour of tourism, were elected as town councillors. Secondly, because a neighbourhood development plan was proposed. Thirdly, because all the branches of banks were gone. However, spirituality has not become the core of tourism in Glastonbury yet. I suppose it is because spirituality is an individualistic practice, not accepted by everybody or not based on the tradition of any specific region. This situation shows that spirituality is easily connected to consumerism, but that it is difficult to make it the core of tourism, which is often expected to develop the region.